

## 協働的問題解決授業を実現する手立てについての事例研究

### ー 音楽科における授業デザインの提案 ー

松 前 良 昌 ・ 天 野 秀 樹

#### 1. 広島大学附属東雲中学校における授業デザインの視点

広島大学附属東雲中学校(以下,本校と略記)では,昨年度より「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う教育の創造を研究テーマとし,研究を進めてきた。本校ではまず,グローバル時代をきりひらく資質・能力を,子どもの主体性・協働性・多様性の3つの特性から捉えることとして,「さまざまな文化や価値観を理解し,多様性を認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義した。次に,本年度の研究の目的を,グローバル時代をきりひらく資質・能力を育成するための協働的問題解決授業を実現する手立てを明らかにするために,授業デザインの視点を提案することにした。

今年度6月の授業研修会をもとに,前期に全教員が,日々の実践において協働的問題解決がうまく生じた授業の要因をあげた。それらを整理したものが表1である。

表1 協働的問題解決を実現する授業デザインの視点(平成28年前期)

<p><b>I. 授業前の構想 に関する視点</b></p> <p><b>1 問題の設定</b></p> <p>① 身近な問いや切実感のある問い,社会や地域に貢献できる問題を学習題として設定すること</p> <p>② 1つの概念について,多様な考えが出せる問題を設定すること</p> <p>③ 問題解決の結果が複数存在するようなオープンエンドの問題を設定すること</p> <p>④ 導入時に,子どもが本時の課題を確認し合う活動を設定すること</p> <p>⑤ 個人の問題解決から,集団の問題解決へ変化させなければならない状況を設定すること</p> <p><b>2 学習方法</b></p> <p>① 自らの生活経験や既習の学習内容に基づく発言を数多く実現させること</p> <p>② 対話の前に考えをまとめる時間を十分とり,すべての子どもが考えをもてるようにすること</p> <p>③ 子どもの中から「なんで」「どうして」といった言葉を生み出させるようにすること</p> <p>④ 子どもたちの表現・活動を動画で撮影し,自分の表現・活動をメタ的に考察させること</p> <p>⑤ 問題解決に向けて多人数の前で考えを発表することを目的とすること</p> <p>⑥ 操作活動や実験を設定して自分の考えを伝えたいと思う意欲を高めさせること</p> <p>⑦ ジグソー学習法を用いること</p> <p><b>3 その他</b></p> <p>① 問題解決が何につながる知識なのかを意識させること</p> <p>② 問題解決の鍵となる考え方を繰り返し指導しておくこと</p> <p>③ 問題解決に向けた教師の働きかけを弱め,子どもの意見を重視すること</p> <p>④ 分かったつもりの状態をつくらないため,よく考えたグループの発表を最後にすること</p>
<p><b>II. 対話の仕方 に関する視点</b></p> <p><b>1 対話の視点</b></p> <p>① 1つの視点に焦点化した話し合いをさせること</p> <p>② 複数の考えの共通点を見つける対話をさせること</p> <p>③ 自分のもっている考えを基に,一段階抽象的な問題について対話させること</p> <p>④ 問題解決の評価の視点を子どもに与えておくこと</p> <p>⑤ 根拠とは何かを示し,根拠に基づいた対話をさせること</p> <p>⑥ 同じ体験や活動を基にすることで,同じ土台に立って対話させること</p>

## 2 対話の進行

- ① 対話を単なる考えの報告会にさせないこと
- ② グループ内のすべての子どもに自分の意見を述べさせること
- ③ グループ内で役割分担をさせないこと
- ④ 男子と女子に分かれた話し合いをさせないこと
- ⑤ 対話の時間を長すぎない程度の適切な長さに設定すること
- ⑥ 次の発話者に, 学習内容がつながる発話を数多く実現させること
- ⑦ 多面的な考えを発言する子どもの考えをもとに, グループ全体の思考を促進させること
- ⑧ よい考えを共有させること
- ⑨ 同意や提案ができるような, 建設的な対話にさせること
- ⑩ 付箋を活用して, 対話における考えのグルーピングの変化の過程を可視化させること

## Ⅲ. 教師の介入 に関する視点

### 1 教師の基本的な姿勢

- ① 子どもの対話には積極的に介入せず, 見守ることを基本とすること
- ② 教師の介入は, 介入するポイントを限定すること
- ③ 教師の介入は, 子ども同士の意見を整理し, 次の方向性を示す程度にとどめること
- ④ 介入が必要なポイントには, 繰り返し介入し, 少しずつ介入の回数を減らしていくこと
- ⑤ 理由をたずねあっているグループには介入しないこと
- ⑥ よい対話の進め方をしているグループを褒め, 認め, そのよさを共有すること
- ⑦ 言葉だけでなく, 図・操作・動き・記号を対応させた説明を促すこと
- ⑧ 子どもの思いに寄り添い, 一緒に驚いたり喜んだりして, 子どもの考えを価値づけること
- ⑨ 子どもの考えが1つにまとまりそうなとき, 「でも, ○○と考えると…」と教師が反論して, 子どもの思考を揺さぶること
- ⑩ 問題解決の結果について, 「どうしてわかったの?」等と問い, 解決方法を自覚させること
- ⑪ 「○○くんは, …したんだって」等, 子ども同士の関わり合いを生む声かけを行うこと

### 2 意見がまとまらないグループに対して

- ① まず1つ暫定的な同意を得るようにさせること
- ② 対話の視点を確認すること
- ③ 子どもの思いや考え, 発言や活動の理由を尋ねること

## Ⅳ. 各教科等の内容 に関する視点

- 1 国語 ①文章を読み返させること
- 2 社会 ①社会的な見方・考え方について話し合ってから, 対話させること
- 3 算数・数学 ①式の意味を明らかにするために連続した問いを生成させること  
 ②式の意味を多面的に説明させること  
 ③「いつでもその方法で解決できるか?」という視点で対話させること
- 4 理科 ①「いつでもその方法で解決できるか?」という視点で対話させること  
 ② 子どもたち自身が考えた観察・実験をさせ, 興味・関心を高めること
- 5 英語 ① 談話の流れや文脈を考える, 行間を読む, 話者の意図を理解する等の単に読むだけでは理解できないような問いを設定すること

## Ⅴ. 学習集団づくりの基盤 に関する視点

- ① 対話を日常的に行い, 子ども同士で認め合う雰囲気をつくること
- ② 相手の立場や思いをふまえたかわりをさせること
- ③ 失敗しても失敗したと言え自分の代わりに発言をお願いできる学級の雰囲気を作ること
- ④ 友達のよい考えをまねることができる雰囲気を作ること
- ⑤ 自分の考えについて意見を求め, 分からないことは分からないと言える雰囲気を作ること

## 2. 音楽科における授業デザインの視点

グローバル化する社会の中で、音楽のグローバル化も進み、様々な国の音楽の要素を取り入れた昨今のポピュラー音楽を通して、多様な音楽に親しむことができるようになってきている。一方で、生活の中で他者とかかわりながら音楽を楽しむ機会は減少している。音楽の授業を通して、他者とかかわりながら多様な考えや表現の価値を認め、自己を表現することができるように考える。

音楽科ではこれまで、学年の発達段階を考慮して、身につけた表現方法を選択し活用できる生徒を育てる指導を行ってきた。そのために、指導者が適切な場面で支援することによって、身につけた音楽的表現や技能などを曲のどの部分でどのように利用するかを自ら判断させ、創造的に表現させることができるような学習を企画してきた。

本年度の研究の目的は、通常の音楽科授業から協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を提案することである。

## 3. 授業の実際と考察

本節ではまず、2学期に合唱コンクールへ向けて取り組んだ音楽科の授業の一場面を取りあげる。次に、その授業を本校研究部員が観察し、作成した資料を示す。

### 3-1. 音楽科の授業～合唱コンクールへ向けた取り組みの一場面

#### 協働的問題解決を生起させるための手立て

- パートリーダーを中心にして声をかけ合う方法について適宜指導しておく。
- 歌詞に関わる歌がもつ意味をあらかじめ伝えておく。
- 比喩表現を用いて歌い方をわかりやすく伝えようとして、自分で工夫して歌うように促す。



**日時** 平成 28 年 9 月 27 日 (火) 第 3 校時 (10:45~11:35) のうち、最後の 15 分間  
**年組** 中学校第 3 学年 1 組 計 39 名 (男子 18 名, 女子 21 名)  
**場所** 音楽教室  
**題材** 合唱  
**本時の目標** 曲想 (音程やリズム等) をつかむとともに、自信をもって歌うことができる。  
**学習の展開**

	学習活動と内容	指導上の留意点 (◆評価)
導入 (5分)	(全体) □コンクールに向けた心構えを確認する。	○合唱台での立ち振る舞いについて指導する。 ○自分たちで取り組む姿勢について指導する。 ○発声、声の響かせ方について指導する。
展開 (10分)	□最初の部分から合わせて合唱する。 ・適宜、授業者の話を聞く。 ・適宜、パート内で声をかけ合う。  □今後の見通しを立てる。	○発声、強弱、息づかい等を、比喩表現を用いてわかりやすく伝える。 ○冬景色等、想いをこめて歌うように呼びかける。 ○仲間の声を聞きつつ、仲間を待たずに自分から声を出すように指導する。 ◆曲想 (音程やリズム等) をつかむとともに、自信をもって歌うことができているか。  ○特に練習が必要な部分を確認させる。 ○練習の計画や心構えを確認させる。



### 3-2. チームで作成した資料

**取りあげる対象** テノール・パート9名のうちの男子生徒2名

#### 取りあげた理由

テノール・パートを取りあげた第一の理由は、授業前の時点で、学級全体の中でも、テノール・パートが最も曲想をつかめていなかったからである。第二の理由は、授業の前半で、テノール・パートのパートリーダーが、パート内のメンバーに自分から積極的に声を出すように呼びかけており、パートのメンバーの意識の高揚が期待できると判断したからである。

男子生徒2名に焦点をあてた理由は、パートリーダーの呼びかけに対してうなずき、その後の活動を表情よく歌い、変化の様相が見られたからである。

**表2 協働的問題解決を実現する授業デザインの視点**

インタビュー記録における生徒Bの「4. A先生がわかりやすく言ってくれたからです。」「6. 『ライオンになったつもりで歌え』のところです。」「8. ライオンのように大きく息を吸い込んで、声を出すところでおもいきり仲間を信じて自分から声を出すという意味だからです。あと、声を出す方向も、下を見るのではなく、ライオンみたいに勇敢に、遠くに響かせる方が良いからです。」の発言にあるように、授業者が適切に比喻表現を用いて指導したことによって、子どもが解決の見通しを立て、協働的問題解決を促進したと思われる。

〔授業デザインの視点①〕 授業者が比喻表現を用いて解決方法を示すこと

インタビュー記録における生徒Cの「4. 入りができるように何度も練習してくれたからです。」「6. 入りの練習をしてくださっている時に、自分で自信をもって、いい加減声を出していかないと、・・・と思った」の発言にあるように、問題解決に向かうために必要な時間を十分に確保したことによって、子どもが意識を変え、協働的問題解決を促進したと思われる。

〔授業デザインの視点②〕 問題解決に向かう十分な時間を確保すること

### 4. 授業デザインの視点を抽出する方法

本節では、まず、実施したインタビュー調査の方法と実際のインタビュー記録を示す。そして、そのインタビュー記録をもとに、協働的問題解決を実現する授業デザインの視点について考察する。

#### 4-1. 調査の方法

まず、授業前に研究部員がテノール・パート9名の生徒に対して、インタビュー調査を実施した。質問内容は、主発問を「これから音楽の授業を受けるにあたって、今考えていることを教えてください。」とした。この発問を選んだ理由は、生徒に負荷をかけることなく、自然に考えていることを表出させるためである。

そして、授業後に研究部員がテノール・パート4名の生徒に対して、インタビュー調査を実施した。4名にしぼった理由は、授業中にパートリーダーの呼びかけに対してうなずき、その後の活動を表情よく歌い、変化の様相が見られたと研究部員が判断したからである。質問内容は、主発問を「音楽の授業を終えて、今考えていることやできるようになったことを教えてください。」とした。この発問を選んだ理由は、生徒から率直に考えていることや自分で捉える変化の様相を表出させるためである。実際には、この発問の他に、生徒が回答した内容について詳細に尋ね返す発問も行った。

インタビュー調査の内容は、研究部員がフィールドノートに記入し、後日プロトコルした。そして、フィールドノートをもとに、インタビュー調査の発話記録を作成した。なお、本稿では、テノール・パート4名の生徒のうち、男子生徒2名に対する発話記録を示す。

#### 4-2. 結果

テノール・パートの男子生徒2名(生徒B・生徒C)について、順にインタビュー調査の発話記録をあげる。

[生徒Bのインタビュー記録]

##### 授業前

1	研究部員	「これから音楽の授業を受けるにあたって、今考えていることを教えてください。」
2	生徒B	「テノールは、全体の中で、とにかく声が小さいので、声量を大きくしていきたいです。」
3	研究部員	「その他に考えていることはありませんか。」
4	生徒B	「いえ、特にありません。考えているのは、とにかくこの授業はそれ(テノールの声量)です。」

##### 授業後

1	研究部員	「音楽の授業を終えて、今考えていることやできるようになったことを教えてください。」
2	生徒B	「えーっと、そう。まず、最後の『あー』が出るようになりました。」
3	研究部員	「それは、どうして出るようになったのですか。」
4	生徒B	「A先生がわかりやすく言ってくれたからです。」
5	研究部員	「A先生はどのようにわかりやすく言われたのですか。」
6	生徒B	「『ライオンになったつもりで歌え』のところです。」
7	研究部員	「『ライオン』で、どうして出るようになったのですか。」
8	生徒B	「えーっと、それは、ライオンのように大きく息を吸い込んで、声を出すところでおもいっきり仲間を信じて自分から声を出すという意味だからです。あと、声を出す方向も、下を見るのではなく、ライオンみたいに勇敢に、遠くに響かせる方が良いからです。」
9	研究部員	「わかりました。」「その他で、この授業でできるようになったことを教えてください。」
10	生徒B	「はい。テノールは、全体的に今日の授業でだいぶ出るようになってきたと思います。」
11	研究部員	「Bくんが最後の『あー』が出るようになって、そして、テノールもだいぶ出るようになって、良かったですね。」
12	生徒B	「はい。授業前に、とにかくテノールの声量が気になっていて、自分も頑張っって全体の歌声を良くしようと思っていたので、いい感じになってはきていると思います。」
13	研究部員	「全体の歌声とは、学級全体ということですか。」
14	生徒B	「はい。」
15	研究部員	「わかりました。」「その他で、この授業でできるようになったことを教えてください。」
16	生徒B	「強弱のつけ方が少しわかるようになりました。」
17	研究部員	「それは、どうしてわかるようになったのですか。」
18	生徒B	「周りの人、特にパートリーダーのDくんが教えてくれたからです。」
19	研究部員	「Dくんはどのように教えてくれたのですか。」
20	生徒B	「ここからやさしく歌う、というところを一つひとつ教えてくれました。」

[生徒Cのインタビュー記録]

##### 授業前

1	研究部員	「これから音楽の授業を受けるにあたって、今考えていることを教えてください。」
2	生徒C	「自信をもって歌えるようにすることです。」
3	研究部員	「その他に考えていることはありませんか。」
4	生徒C	「えー、歌詞のイメージを声で表現していくことです。」
5	研究部員	「その他にありませんか。」
6	生徒C	「いえ、ありません。」

##### 授業後

1	研究部員	「音楽の授業を終えて、今考えていることやできるようになったことを教えてください。」
2	生徒C	「えー。自信をもって入りができるようになりました。」
3	研究部員	「それは、どうして自信をもって入りができるようになったのですか。」
4	生徒C	「えー。最初の30分間実習の先生が僕たちに、入りができるように何度も練習してくれたからです。」
5	研究部員	「実習の先生が、入りができるように何度も練習してくれたから、自信をもって入りができるようになったのですね。」

6	生徒C	「はい。あと、実習の先生が入りの練習をしてくださっている時に、自分で自信をもって、いい加減声を出していかないと、みんなに悪いと思ったからです。」
7	研究部員	「みんなとは、誰のことですか。」
8	生徒C	「えっ、みんな？ それは、クラスのみんなです。」
9	研究部員	「わかりました。」「その他で、この授業でできるようになったことを教えてください。」
10	生徒C	「えー。雪の白さとかで白い色を表現したりー、みたいなことができたことです。」
11	研究部員	「それは、どうして雪の白い色とかを表現しようとしたのですか。」
12	生徒C	「それはー、えー、担任の(先生の)時間とかでー、E先生が歌詞の意味をいろいろ教えてくれたからです。」
13	研究部員	「なるほど。E先生がいろいろ教えてくれたんですね。」
14	生徒C	「はい。そこから、できるだけ歌詞の意味をできるだけ表現したいと思いました。」

#### 4-3. 考察

テノール・パートの男子生徒2名(生徒B・生徒C)におけるインタビュー調査の発話記録の中で、学級全体で曲想をつかもうとしたり、自信をもって響かせようとしたりすること、すなわち、協働的問題解決を実現している場面が、2点取りあげられる。

第一に、生徒Bのインタビュー記録(授業後)における「12(生徒B)．授業前に、とにかくテノールの声量が気になっていて、自分も頑張って全体の歌声を良くしようと思っていたので、いい感じになってはきていると思います。」の発言である。この生徒Bの発言は、自分を含めたテノール・パートの工夫によって、学級全体が問題解決に向かっていることを自己評価している発言と捉えることができる。また、その要因は、生徒Bの「4(生徒B)．A先生がわかりやすく言ってくれたからです。」、「6(生徒B)．『ライオンになったつもりで歌え』のところです。」、「8(生徒B)．ライオンのように大きく息を吸い込んで、声を出すところでもいっけり仲間を信じて自分から声を出すという意味だからです。あと、声を出す方向も、下を見るのではなく、ライオンみたいに勇敢に、遠くに響かせる方が良いからです。」の発言にあると捉えることができる。これらの発言から、協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を、「授業者が比喩表現を用いて解決方法を示すこと」とした。

第二に、生徒Cのインタビュー記録(授業後)における「6(生徒C)．実習の先生が入りの練習をしてくださっている時に、自分で自信をもって、いい加減声を出していかないと、みんなに悪いと思ったからです。」の発言である。この生徒Cの発言は、自分で意識を変えることによって、学級全体が問題解決に向かうことを意味する発言だと捉えることができる。また、その要因は、生徒Cの「4(生徒C)．入りができるように何度も練習してくれたからです。」、「6(生徒C)．入りの練習をしてくださっている時に、自分で自信をもって、いい加減声を出していかないと、・・・と思った」の発言にあると捉えることができる。これらの発言から、協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を、「問題解決に向かう十分な時間を確保すること」とした。

#### 5. 所感と今後取り組んでみたいこと

本校で取り組む協働的問題解決授業は、音楽科としてずいぶん前から取り組んできているつもりであった。したがって、今年度は、通常の授業過程から授業デザインの視点を抽出することを試みた。その結果、これまでに授業をデザインするうえで必要だと感じていた次の2点を明らかにできた。

- (1) 授業者が比喩表現を用いて解決方法を示すこと
- (2) 問題解決に向かう十分な時間を確保すること

今後は、合唱コンクールに向けたパート練習における学びの様相について考察していきたい。

[文責] 2節, 3節, 5節 …… 松前  
 1節, 3節, 4節 …… 天野